


愛してると言いなさい



登場人物  
紹介

◀ 国王・王妃・王太后

(右)アワード(ダスタ・フォン国国王)  
(左)カルパロッサ(王妃)  
(中央)アビオン(王太后)

ラヴェル▲

リゼの第4弟子。  
アルディにべた惚れ。

ジーチェ▲

紅緒の専任侍女。

ジーク▲

ダスタ・フォン国の王子。  
優れた能力と美貌を持つが、  
筋金入りの女嫌い。

◀ チビクロ

ベニオの愛猫。

カトラー▲

ジークの側近。  
宮内モテランキング  
不動の第2位。

アルディ▲

王妃お気に入りの貴族の  
令嬢。紅緒を「お姉さま」と  
呼んで慕う。

さがるべにる  
相良紅緒▲

リゼの助手。普段はOLとして  
働いている。  
今回、ジークの交際指南役に  
抜擢された。

## 目次

プロローグ	7
第一章 魔法使いと助手	11
第二章 完璧なる王子計画	39
第三章 踊る王宮	94
第四章 騒がしい日々	183
第五章 特別な関係	257

「困っているのだ」

「僕、忙しいんです。用件は？ くだらなかつたら帰ります」

「聞いてくれ！ 深刻なのだ。余はこのままでは孫の顔どころか嫁の顔も見られんだ！」

「またその話ですか」

リゼはうんざりして言った。

自宅兼研究室に緊急呼び出しの知らせがあつたのは、つい先程のこと。

大魔法使いリゼ・クラヴィエは実験を取りやめ、王宮最奥に隠された秘密の間に駆けつけたところ（正確には転移した）、いきなりわつと纏すがられた。

憔悴しやうすいし、やつれた顔で泣きごとをこぼすのはダスタ・フォン国第九十三代国王、アワード。

銀髪紫瞳ぎんぱんしじゆう、陽に焼けて筋骨たくましく、王族にのみ許された紫衣むらさきぎをゆつたりと纏まとい、銀糸の刺繍が美しい肩布を斜めにかけている。思慮深く、機知に富み、戴冠以来統治者として優れた手腕を発揮している。その風貌は四十九歳という実年齢よりも、ゆうに十は老けて見えた。威厳と貴禄を備

## プロローグ 心当たりはあります

えたアワードだったが、自分の子供に対してはただの親ばかりだった。

「またではない！ 余は本当に困っている。助けてくれないか。友達だろう」

「男同士の友情はあてにならないんです」

「いや、おまえに限ってそんなことはない」

ひた、と見つめられてリゼは洗面をつくった。「ち」と舌打ちして、腕を組む。

「……来る日のお妃選びに備えて王子の女嫌いを治したいと、そんな話でしたよね」

「いや、女性が嫌いなわけではない。ほんの少しだけ、女性不信というか——」

「交際指南役の女性を百人もクビにすれば、立派な女嫌いでしょう。それで、僕にどうしろと？

言っておきますけど、『女好きになる薬』なんてくだらないものを調査するのはごめんですから」

「そうではなく、有能な人材を紹介してほしいのだ」

「人材？」

「そう。王子という身分に気後れせず、余計な下心もなく、真面目で信用のおける、そんな女性が  
必要だ。仕事としては、息子が女性と普通に交流——いや、軽く交際できるくらい女性と親しく接  
することができれば、それでいい。できれば、そうだな、秋までに」

リゼは口に手をあてた。ぼわん、とひとりの女性を思い浮かべる。明るくて元気で真面目で親切  
で優しくて、ちよつと鈍感で。家事が得意で世話焼きで面倒見がよくて、少しそそっかしい。表情  
がころころ変わるところも、よく笑うところも、とてもかわいい——大切なひと。

「心当たりはありますか」

「なにっ。本当か！ ぜひ紹介してくれ」

「いやです」

「どうして！」

「誰にも会わせたくないんです」

リゼはきつぱりと言いつつ。心の真ん中で輝く笑顔。ふと思いつき出すだけで胸が温まる。

「彼女は僕の宝物です。命です。すべてです。かけがえのないひとです。すごく大事にしているん  
です。うっかり誰かに苛められたり、傷つけられたり、口説かれたり、惚れられて持っていかれた  
りしたら、困るんです。僕のなんですから」

「貸してくれ！ 絶対に返すから」

「ところが返したくなくなるひとなんです」

「そこをなんとか頼む！」

アワードが突然頭を下げた。リゼは眼を瞠った。一国の王のとする行動ではない。

「頼む、リゼ」

リゼは押し黙った。切迫した声に胸を衝かれる。アワードの姿は相当くたびれていた。よほど追  
いつめられているのだろう。

「約束する。息子が人並みに女性と交際できるように次第、すぐに返す。無論、賓客として扱  
おう。接近禁止令と緘口令を出し、新しい交際指南役に接触することだけでなく、一切の噂を禁じ  
る。礼もする。それほど長い期間のことではない。秋まで——あと三ヶ月弱、この夏の間だけだ」

藁にも縋るような目で見つめられ、ついにリゼは折れた。

「……わかりました。訊くだけ、訊いてみてあげます。引き受けるかどうかは彼女次第です。ただし、もし彼女が引き受けたとしても、絶対の絶対の絶対に、次のことを守ってくださいね」

「なんだ」

「悪さをしない、苛めない、傷つけない、引き止めない。全部きっちり守ると、いまここで誓ってください。でないと彼女に話は振りません。それでなくとも、僕はものすごく不本意なので」

「わかった。誓う」

アワードと眼が合う。リゼは最後に凶悪な形相で脅しをかけるのを忘れなかった。

「……言っておきますけど、彼女の身に少しでもなにかあったら、ただではすみませんから。相手  
が誰であろうとなんであろうと、僕、完膚なきまでにやっつけますからね……？」

その場合起こりうるだろうすべての凶事を覚悟して、力強くアワードが首肯した。

「それで、いつから？」

「慌てないでください。召喚しなきゃならないんです」

沈黙が落ちる。アワードの眼が点になり、怪訝そうに頬が歪む。

「……召喚？ つて、まさか」

「ええ。異世界の住人なんです」

リゼはもう一言付け加えた。

「僕の助手です」

## 第一章 魔法使いと助手 ～異世界からの召喚状～

一

金曜の夜から土曜の夜明けにかけて、境界を越え、手紙が届く。

それが届くと、どんなにぐっすり寝ていても、なんとなく眼が覚める。

暗い部屋の中で、ホタルのように青白く発光する手紙は、異世界からの召喚状。

相良紅緒は朝起きると、枕もとにあるものを見つけた。召喚状だ。昨夜いつものように届いたのを確認して、またうとうとと寝入ってしまった。早速、食事を済ませ、身支度を整える。

膝丈のスカートと七分丈のカットソー。長い髪はまとめて結び上げ、鏡の前で軽く化粧をする。

それからアパートの戸締りをすべて確認した。固定電話は留守録とファックス受信に切り替え、携帯は丸テーブルの上。パソコンの電源を落とし、外から覗けないよう、レースのカーテンを引く。持ち物は、二日分のお泊まり道具と万能通訳機能付き魔法のピラス。それから身分証兼緊急連絡用の指輪を嵌めて、足の疲れない靴を履く。

「あ。いけない、忘れてた」

買っておいいた猫じゃらしを荷物に足す。

「よし、行くか」

ペーパーナイフで手紙の封を切る。半分に折られた用紙をひらくと、几帳面に綴られた異世界の文字がふわあ、と飛び出てきた。そのまま蜜にたかる蟻のように、文字はくるくると螺旋を描いて紅緒を取り巻く。

紅緒は眼を瞑る。光が生まれる気配。何度味わつても、まだ眩しいと思う。

そのまま音もなく連れ去られる。境界を越えて、空間から空間へ運ばれる一瞬のなんともいえない奇妙な浮遊感覚は、いつまで経つても慣れない。

紅緒は眼を開けた。

「やあ、来たね」

そこにいたのは、年齢不詳、やたらに見てくれだけはいい、大魔法使いりぜ・クラヴィエ。

上背は二メートルくらい、腰が高くて脚が長い、細身の八頭身。長めのさらさらした金髪を紐で無造作に束ねている。切れ長の紺青の双眸、意地悪そうな薄い唇、潔癖な感じの高い頬、筋の通った鼻。腹黒いのに爽やか系のこの美形との付き合いは、もうかれこれ四年になる。

「来ましたよー。あーあ、またこんなに散らかして」

さいわい、あちらとこちらの行き来にタイム・ラグは生じない。出発した時間にそのまま戻るの

で都合がいい。例えば、六月第三週土曜日の朝十時に出たら、たとえどれほどの期間をこちらで過ごそうとも、六月第三週土曜日の朝十時に帰れるのだ。

「誰にも迷惑かけないし、なんにも支障はないだろう？ いただければいいじゃないか」とは、引き止めようとすする彼の常套句。でもそんなわけにもいかない。あまりに長いことこちらにいると、誰もいない部屋に帰るのがいやになるし、仕事に向かうのも億劫になる。やはり節度というもの的大事だと、自分に言い聞かせるのもいつもの話。

紅緒は週末になにも予定がなくて、心と身体に余裕があるときは、こちらに来て『魔法使いの助手』というアルバイトをしていた。

まあ助手といえば聞こえはいいが、実のところは、簡単な筆記作業、調合の手伝い、使い走りや片付け、食事の支度を含めた家事全般など、ほとんど雑用係みたいなものだ。

「ンもう。本当にどうにかしなさい、その悪癖、この魔窟。片付ける私の身にもなってください」  
「片づけよりも先にごはんを作ってほしい。一昨日からなにも食べてないんだ」

「だからどうしてそう不摂生な生活をするんです！ あれほど三食きちんと食べなさいって言うておいたのに。誰のためでもない、自分のためなんですよ」

「僕の作るごはんはまずい。食べる気がしない。第一、面倒くさい」

「そういう問題じゃないの！ 身体に悪いと言っているんです」

紅緒がびしやりと叱りつけても、なぜかりぜはとびきり嬉しそうで。

「私は真剣に心配しているのに……」

「……うん。ふふふふふふふふ」

紅緒が怒って睨みつけているのに、唸るうなように含み笑いをし、顔を赤らめるリゼ。

どうしてそこで照れるのか、わからない。

「だいたい、なにか作るうにもまず買物に……なに、この食材の山は」

「ん、今日あたり、君が来てくれるだろうと思つて買物は済ませておいた。氷蔵庫ひょうぞうこにもたくさん入つてる」

「……面倒くさがりなくせに、こんなところばかりちゃっかりしてるんだから」

紅緒は専用の白いエプロンをつけながら、厨房ちゅうぼうに立った。腕捲りうでまきをする。この家の厨房は紅緒の注文に合わせて魔法で改造されており、火も水も使い勝手がいい。調理器具も一通り揃っている。

紅緒は食材をチェックした。こちら世界の食材は、はつきり言つて、はじめのうちはとても扱いくくかった。

向こうの世界によく似た食材もあれば、全然違うものもある。野菜は緑黄色、赤紫せきし色、茶黒ちやくろ色から、蛍光色まで。穀物は、米・小麦に似て非なるもの。肉は鳥類、哺乳類ほいちゅうりゆう、爬虫類ほちゆうりゆうなど、種類豊富。魚は淡白な白身魚から竜魚と呼ばれる巨大魚まで、色々だ。

見た目は向こうの世界にそっくりでも、味は全然違つたりするからタチが悪い。

試行錯誤の末、紅緒は、混乱しないように一般的食材であると教えられたものを、大きく三つに分けてみた。

見た目はそっくりで味が違うもの、見た目は違つて味が似ているもの、そのどちらでもないもの。

味も見た目も違う未知の食材は、こちらの世界の名称を覚えたが、見た目と味のどちらかが向こうの世界と似ているものは、向こうの名前に「もどき」をつけて呼ぶことにした。

リゼも紅緒の料理をこの四年の間にすっかり食べ慣れたらしく、最近では「もどき」をつけることなく、「ホウレンソウ採つた？」とか言つてくる。

なのでこの頃は「もどき」もつけずに呼ぶことの方が多くなった。

さらに食堂に弟子入りし、料理修業をした甲斐もあつて、いまでは未知の食材も上手に使えるし、お菓子も作れる。そうしてわかつたことといえば、異世界の「食」も、創意工夫をすれば、なじみ深い「食」になるということだ。

「ずっと待っていたんだ」

厨房の入口に寄りかかり、じつとこちらを見つめながらリゼが微笑する。

紅緒は野菜の水洗いはじめながら、小さく肩を竦めた。

「たかが一週間じゃないですか」

一週間といつても、こちらの一日は約三十時間と長い。朝・昼・晩と十時間ずつ区切られているので時間配分は把握しやすい。こちらの一ヶ月は四十五日。単純計算で一三五〇時間。二十四時間で割つて換算すると、約五十六日。つまり、こちらの一ヶ月が向こう世界の約二ヶ月に相当することになる。

「一週間は長いよ。僕としては、いつも君にいてほしいんだから」

「私はあなたの奥さんじゃありませんので、いつもなんていられません。三日もなにも食べていな



いなら、胃に優しいものかな……鳥おかゆ食べる？」

「食べる」

「蒸し野菜サラダに、ホーホー貝はバターでソテーにでも。あ、ニンニクもあるなら、ガーリックチップもつけようかな。デザートにプリンも食べる？」

「食べる」

「はい、わかりました。じゃ、おとなしく座って待っていてください」

「あのさ……いつも君にいてほしいっていうのは、本当の本当だから」

紅緒は顔を上げてリゼを見た。吸い込まれそうなほど澄んだ深い紺青の眼は真剣で、一途で、真面目くさった態度がいじらしい。

よほど飢えていたんだなあ、と、リゼの心情とはまったく別の方向に解釈しながら、紅緒はかわいそうなひとを見る眼で彼を見やった。

「はいはい。大丈夫。心配しなくても、あなたみたいになにもできないひとを見捨てやしません。

よっほどひもじかったの？ 作りおきのおかずが足りなかったから、そんなこと言うんでしょう？」

「えっ。ちがっ」

「次から、もっとたくさん作っておくね」

なぜか、リゼは壁に手をつき、がつくりとうなだれる。

紅緒が訝しげに小首を傾げる前で、遠くを見る眼でなにか言いかけたものの、やがて諦めたように、ふやけた微笑を浮かべた。

「……うん、ぜひそうして」

「了解です」

「ははは……ちっ、なんでこんなにニブんだ……」

リゼが大仰に「はーっ」と溜め息をつく。

紅緒はそれをごほんの催促と受け止める。「まかせなさい」と無邪気に笑って、握りこぶしポーズを決めてみせた。

## 二

リゼの自宅兼研究室は、はつきり言って、物が多すぎる。

一応一軒家だが、居住空間はセミダブルサイズのベッドの上と厨房と食事場所だけ。あとはすべて分厚い魔法書や怪しげな研究材料やいかにもな実験道具でしっちゃかめっちゃかだ。

なので、紅緒の仕事はだいたい整理整頓からはじまり、掃除、洗濯、食事の支度へと移行していくのだが、今日はまずリゼの食事を作ってから、片付けに取りかかった。

家主であるリゼは、せつせと食べるのに忙しい。

こちらの人間は平均身長が成人男性の場合ほぼ二メートル、女性でも一八〇センチくらいが普通で、紅緒の一六〇センチというのは、十四、五歳ぐらいに見られる。おまけにみんな、よく食べる。

そのためか、気になる部分の発育具合が明らかに違って、紅緒は年齢のわりになんとも貧弱な体型に見られるのだが、それについては既に諦めがついていた。

そんな紅緒が食事中に眼の前をうろちよろすると気が散るのでは、と思うのだが、リゼはといえば無神経にもほどがあつて、

「いや、まったく気にならない。砂ネズミみたいで、かわいい」  
などと言う。

それが二十四歳の女性に対して真顔で言うことなの？ と、紅緒は無言でこめかみに青筋を立てながら、手当たり次第に散らかったものを元の場所に戻していった。

「あのさ」  
「お茶ですわね」

食卓の上に並べたものがきれいに平らげられているのを見て、満足する。やはり完食されると気分がいい。なので、さっきの失礼な発言は水に流してあげようかな、と思う。

紅緒はさつと動いて、手を洗い、少し前に蒸らしておいた茶葉に湯を注ぐ。茶器は手造りで、こちらの土で紅緒が焼いたものだ。

「はい、どうぞ」  
「ありがとう」

素焼きの不細工なそれをリゼは気に入っていて、お茶は決まってこれで出す。こちらのお茶は華やかな甘味のある茶葉が主流で、紅緒は何種類か自家ブレンドしたものを常時切らさずに用意して

いた。

「ところでさ」

お茶を啜りながら、リゼが言い出しにくそうに続ける。

「新しい仕事、するつもりある？」

紅緒は食器を下げる手を止めた。

「それ、あなたの助手をクビってこと？」

リゼが「げえほっ」とむせる。それから叫んだ。

「断じて違う！」

「こら、食事中に大声を出さないの。行儀悪い」

「ごめん……だけど君があんまり恐ろしいことを言うから」

「おおげさ」

「おおげさじゃない！ 僕はもう君なしでは生きていけない身体なんだっ」

「はいはい」

涙ながらに訴えるリゼに対して、紅緒はくすくす笑いながらさらりと聞き流し、訊いた。

「じゃ、別の仕事が増えるってこと？」

「うん、まあ、そうなるかな」

「断つてもいい？」

こちらとあちらの行き来にタイム・ラグはないが、それでも自分の時間が止まるわけではないの

で、疲労はその分蓄積される。いくら体力に自信があるといっても、限度があるというものだ。  
紅緒は「実はね」と切り出した。

「もうすぐ会社の夏季休暇で、それに合わせて社員旅行があるの。ハワイに四泊五日。あんまり  
り気じゃなくて行くつもりじゃなかったんだけど、上司に強く誘われていて断りにくいの」

食卓を台布巾で拭いていた紅緒の手首を、リゼが不意に押さえつけた。

「ハワイって？」

間近にあるリゼの顔が心なしか険しい。紅緒は作業を続けるために手を抜こうとしたが、逆に握り締められる。

「リゾート地。海辺で水着を着てくつろいだり、お買い物したりするの」

「上司、って……男？」

「そう」

「水着、ってどんなの？」

「泳ぐときに着るから布面積が少ない、というか、裸に近い恰好になるかな」

「は、裸っ？」

リゼの引きつった声が裏返る。

「や、裸じゃなくて、胸とかお尻はちゃんと隠れるから大丈夫」

「だめだだめだだめだだめだだめだだめだ、絶対、そんなの、許さないぞ、俺は！」  
突然激昂したリゼに、紅緒はきよんとした。

「『俺』？」

リゼがはっとして、慌てて取り繕う。

「僕！ 僕だった、僕だから！ とにかくっ。僕は許しませんよ、そんなあられもない姿の君を、  
他の男の眼にさらすなんて、冗談じゃあないっ」

「許すも許さないも、大人の付き合いってものがあるの。そもそも社員旅行だから——いいかげん  
に、手、放してください。痛いです」

「行かせない」

ぐっと身体ごと引き寄せられて、両方の二の腕をがっちり掴まれる。斜め上から見下ろされたが、  
その紺青の眼は怒っているように黒々と燃えていた。

わけがわからず、紅緒は眉をひそめて身動きする。

「ちよっと力ゆるめて……なあに、急にどうしたの？」

「行かせないから、絶対」

声に切羽詰まったものが混じり、ぎゅっと細められた眼は苦しげで。その様子があまりに狂おし  
く、必死だったので、紅緒はほだされた。

「わかりました、行きません」

「……本当に？」

「行かせたくないんですよ？」

「うん」

紅緒は溜め息をついて「しょうがないなあ」と呟き、続けて言うことに――

「寂しがりやなんだから、もう」

「……は？」

「寂しいんですよ？ 置いていかれるのが」

「いや、まあ、君がいないのはそりゃ寂しいけど……って！　そ、そうじゃなくて。僕が言いたいのは、無防備に男の誘いに乗るなどいうことであって」

「そんなにむきにならなくてもいいのに。ちゃんと帰ってくるし、喚ばればこっちにも来るわよ。どうせならハワイ土産にマカデミアナッツでも買ってあげようと思っていたけど、リゼがそんなにいやがるなら、不参加申請しておきます」

それでもまだ疑っているのか、不安そうな眼でじーっと見つめてくるので、紅緒は「約束するから」と真面目に請け合った。渋々リゼが手を放す。紅緒はなにこともなかったように身体を離して、スポンジの代用品の海綿を手に、食器を洗いはじめた。

「……どうしたら君を帰さないですむかなあ」

「え？」

「ん、なんでもない――いや、なくはない。そうか！」

突然、素っ頓狂に声を高く張り上げられて、紅緒はびくつとした。あやうくりゼ専用の茶器を落として割るところだった。半歩引いて身体を振り、非難のこもった眼でリゼを見る。

「急に大声出さないで。びっくりしたじゃない。どうかしたの？」

「うん。あのさ、さっきの話だけ」

「どの話？」

「新しい仕事」

ああ、と紅緒は相槌を打つ。そういえばその件を持ちかけられて、なんだか話が逸れたのだ。

「実はその話を持ってきたのは、僕の友達なんだ」

「えっ。リゼって、友達がいたの？」

間。沈黙が重い。

先に謝ったのは紅緒だった。

「ごめんなさい。とつても失礼だった……でも、だって私、あなたのところに来て四年経つけど、誰にも紹介されたことなかったから、てつきりひと付き合いが嫌いなんだとばかり思っていたの」

次にリゼも謝った。

「それは君との時間を誰にも邪魔されなくなかったからで……でも、そうか。確かに他の人間に紹介したことなかったな。ごめん」

「いいの。リゼに友達がいるってわかっただけで嬉しい」

紅緒は正直に言っただけ微笑んだ。つられたように、リゼもきれいな歯を見せて微笑する。

「友達は少ないけど、いる。本当に少ないけどね。僕がひと付き合い、というか、人間があまり好きじゃないのは本当のことだし。実際、そこの有象無象はどうでもいいから、大切な君を紹介するなんてもったいないことはしたくない。第一、他の野郎に見せた時点で手を出されるかもしれない

いし、そんな危険は冒したくなくて当然だろう？」

熱のいったりゼの主張に、「ぶ」と紅緒は吹き出した。

「私をそんな眼で見るひとなんていないわよ」

「いるだろう、ものすごく、あちこちに！」

「いない、いない」

すると、リゼはムキになって指折り数えはじめた。

「いつも行く野菜屋の息子、香辛料屋の主人、情報屋の若造、郵便配達人、引きこもり貴族、辺境警備隊の奴ら、それに、それから、それと……」

ぶつぶつと呟く姿はちよつと変なひとだ。

紅緒は、「もしもし、リゼさん。戻ってきなさいよ」と肩を揺すった。

「はっ」

「うん、それで？ また話が逸れたけど、あなたのお友達がどうしたの？」

リゼは咳払いをした。深刻そうに長い息をつき、睫毛を伏せる。

「困っているんだ、ものすごく。それで助けてほしいと頼られてね、弱っている」

「リゼが助けてあげられないこと？」

「僕じゃだめだ。君じゃなきゃだめなんだ」

「なにそれ、どんなこと？ 仕事の内容は？」

真面目に聞こうと仕事の手を休めて、きちんとリゼに向き合う。だが身長の違いがありすぎた。正

面から眼を見たいのに、首を急な角度に曲げた不自然な立ち姿になってしまう。

それを察したのか、リゼは手近にあった椅子を手前に引くと、背凭れを胸に抱えるように後ろ向きに腰かけた。さりげなく紅緒の手をすくい取り、きゅつと握り締める。

「僕の友達の息子の『女嫌い』を治してほしいんだ」

『女嫌い』？」

「そう。話を聞くところによれば、相当ひどいらしいよ。母親以外とはほぼまったく口もきかない」「それは……確かにひどいかな」

「だろう？ 彼の父親がそれを見かねて、交際指南役として女性を百人雇ったものの、過度のスキンシップを嫌った彼により、全員もれなくクビにされた」

紅緒は軽く眼を睜った。

「それで、真面目で信用のおける人材を紹介してくれないかと頼まれたんだ」

話を聞いた紅緒は、最初、半信半疑だった。いつものように、自分をこちらの世界に引き止めたがるリゼの苦肉の策ではないかと、ちよつぱり疑っていたのだ。

だがリゼは至って真摯な顔で、紅緒の反応を窺っている。

口から出かけた言葉を呑み込み、考えてみる。結論はわりとすぐに出た。

「それ、私じゃ力不足よ」

「そんなことはないだろ」

「あるの。つまりその、私、男性に女性とのお付き合いの仕方を教えられるほどの経験がないの。

皆無に近いの。れ、恋愛なんて、ほとんどしたことないから……」

あまり大きな声で言えることじゃないので、言葉も声も尻すばみになる。神妙に俯いた紅緒だったが、すぐに顎を持ち上げられた。

「わ」

思わず、腰が引ける。眼の前に、ずいとリゼの整った顔が迫っていた。顎をすくいとついているのは、神経質そうな細い指。

「あのさ」

「な、なに」

語尾が上ずる。リゼの表情が、再び険悪になっている。眼もきついが、声も刺々しい。おまけに逆らうことを許さないような、びりびり緊張した空気。

「……皆無じゃないってことは、少しはなにかがあっただ……？」

びくりとする。紅緒は身体を引こうとしたが、リゼはそれを許さない。

「相手は誰？ どっちの世界の男？」

厳しく冷たい声だった。紅緒は射竦められたまま、だがかろうじて、突っ撥ねた。

「そんなの、気にしないでいいです」

「いや、気になる。白状なさい、いますぐに」

頭ごなしの発言がむかついた。紅緒は空いている方の手で、ぺし、とりゼの手をはたき落とす。

「個人的なことです。話す必要はありません」

すると、音を立ててリゼが立ち上がり、蹴るように椅子をどけて紅緒の肩を掴んだ。身動きがでさないように、押さえつけられる。

「どうしても言わない気なら……」

殺気だったまなざしで凄むりゼは、別人のようだ。紅緒はかろうじて首を振ったが、威圧され、言葉が出てこない。

そのとき、小さな黒い影が視界を斜めによぎった。

「っ」

咄嗟に、リゼが首を後ろに反らす。肩を拘束していた手が浮く。

紅緒はその隙に逃げ、床に軽やかに着地した小さな黒い影に眼を落とした。

「チビクロー！」

「にー」

喉を鳴らして応えるのは、掌サイズの華奢な黒猫。紅緒の愛猫で、こちらの世界のペットだ（ちなみにオス）。なぜかりゼとは折り合いが悪く、紅緒滞在時しかこの家には来ない。不思議なもので、紅緒が召喚されるとすばやく察知して、どこからともなく現れる。

「ありがとう、助けてくれて」

チビクローを抱き上げ、ちゅ、とキスする。

「あーっ。ずるい！ なんでそいつにキスなんて」

紅緒はチビクローを胸に抱きしめたまま、リゼから距離を取って言った。



「リゼ、怖い」

半眼で、まなじり 眦に力を込めて涙がにじ 滲むのをこらえながら、震える声で訴える。  
突如として我に返ったリゼが、大仰に万歳をして、大きくざつと飛び退いた。

「ご、ごめん」

おたおたするさまは、いつもの少し情けない雇用主だ。

ばつが悪そうに頭を掻きながらリゼは謝った。

「悪かったよ——つい、あの、動揺して」

それでもまだ紅緒が警戒を解かないでいると、リゼは天井を仰いで嘆息してから、交差した腕で顔を覆った。居心地の悪い、ぎすぎすした沈黙。ややあつて掠れた低い声が紅緒の耳に届く。

「君に触れた男がいるかもしれないって……そう考えたら、逆上かみ しないではいられなかったんだ。脅すつもりじゃなかったけど、怖がらせたみたいで本当にごめん。許してくれないかな」

「……許してあげる」

紅緒は異議を唱えて「フーッ」と気色ばむチビクロを優しく撫でながら、リゼの傍にいつて「顔を見せて」と言った。リゼが腕の力を抜いて、身体の脇に垂らす。紅緒に向けるまなざしは後悔と反省の色が濃く、そしてやるせなさそうな光を浮かべている。

「……リゼって」

紅緒がくすつと笑って言う。

「こちらの世界での私のお父さんみたい」

その瞬間のリゼは見物だった。

「——お、おとっ……お、父さん？」

ハンマーで頭を殴られたって、これほどの衝撃ではないだろう、というくらいに眼を剥いて、あんぐり口を開けたまま、絶句してしまう。

紅緒は微笑みを残したまま、トン、とリゼの胸を指で軽く突いた。

「だってあんなに血相変えるくらいなもの、私が悪い男に引っかかってないか、心配してくれたんでしょ？」

リゼは過呼吸に陥る寸前のところで踏ん張って持ち直し、懸命に否定した。

「ち、ちがつ。な、なんでそうなるんだ？ お、俺は——いや違った、僕は、単純に面白くなかったんだぞ！ いわゆる嫉妬で頭がおかしくなったアホな男、ってわざわざ自分で言うことじゃないけど、つまり昂る衝動を抑えられなくて、君を無茶苦茶にしたいなーなんて、思ったような、思わないような……えーと、とにかく、お願い、『お父さん』はやめて……」

なぜだか涙目になって懇願してくるリゼは、哀愁を漂わせていた。

紅緒は「はいはい」と適当な返事をして、くしゃっと彼の前髪を撫でた。リゼはされるがまだが、虚空に向かって、つらつらと独りごちている。

「……ない、ないだろ。なんだって、お父さん……なんでこうなるんだ。ニブイ、ニブすぎる。お父さんって、お父さんって、それって眼中にないってことで……いやいやまさか……」

ふと、リゼの顔色の悪さが気にかかった。ずっと休むことなく喋っていたので見過ごしていたが、

唇が青みを帯びている。顔もよく見れば、土気色。

「……まさかとは思うけど、食べていないだけじゃなくて、寝てもいないの？」

凶星だったのか、リゼはぎくりとしたように怯み、眼を泳がせた。

「えーと」

「正直に言いなさい」

追及すると肩をすぼめて、両手を上げた。降参のしぐさだ。

「……君が隣にいないと眠れない」

言いにくそうに呟いて、そっぽを向く。

「それに、研究も佳境だったし、色々と忙しくて——」

「言い訳しないで、寝なさい！ 信じられない、一週間も寝ないなんて倒れるでしょっ。どうしてそう無茶なことするの」

紅緒はリゼをベッドまで引つ張って行って、強引に横にならせた。

「食べて寝る！ 私がいなくても最低限それだけは守りなさいって、あれほど言ったのに」

だが、リゼは子供のようにぐずった。

「せつかく君が来ているのに僕だけ寝るなんて、つまらない」

今度は紅緒が凄んでみせた。

「ね・な・さ・さ・い」

「……はっ」



紅緒のただならぬ剣幕にたじろいで、リゼはおとなしく従った。そのまま、ほどなく寝入ってしまう。

紅緒は血色の悪い、疲れ切ったリゼの寝顔を眺めて考えた。

リゼは人間があまり好きじゃない。よそで愛想よくしている姿など見たこともない。そのリゼの口から、友達なんて言葉を聞いたのは本当にはじめてのことだった。

思えば、助手として雇われているとはいえ、リゼには世話になりっぱなしだ。なにか自分で役に立てることがあるなら、その友達のためというよりも、リゼのために力を尽くしてあげたいと思う。紅緒はリゼの鼻の頭をつついた。あとでもう一度話をしてみようか。

「とりあえず、あちこち中途半端なままになつてる仕事を全部片付けちゃおうかな。ね、チビクロ」左肩という定位置にちよこんとのつかつている黒猫は、きちんと紅緒の言葉を理解しているのかのように「にー」と鳴いた。

### 三

窓拭き、掃除、整頓、トイレとお風呂掃除、食糧庫と氷蔵庫の整理、洗濯、郵便物の仕分け。

ここまで終えたのは、お昼をまわった頃だった。昼食には、こちら流でパンケーキを焼いた。ハチミツとバターをたっぷり塗って、チビクロに与える。それから、見た目はメロンで味は桃にそっ

くりな果物の皮を剥き、小さく切り分けて、これも添える。

「お茶もいる？」

「にー」

「はいはい」

チビクロはひとと同じものをなんでもよく食べる。あまりにも好き嫌いがないので、逆に不安になつてリゼに訊ねると、「契約の猫は普通の猫と違うから、なにを食べさせても大丈夫」という返事だった。どこが違うのかよくわからなかったものの、確かになにを与えてもお腹を壊したことがない。ミルクよりお茶を好むし、辛いものもいける。熱いものはやはりだめだが、冷めるまで待つて、きれいに平らげる。足りなければ催促までしてくるのだから、食事相手としてもまったく不足がない。

「おいしい？」

「にー！」

「よしよし」

紅緒は食卓につき、フォークでパンケーキを口に運んだ。ちら、と奥のベッドを眺めるが、リゼが起きてくる気配はない。いつもであれば食べ物の匂いには飛びついてくるのに。

大魔法使いを名乗るリゼの助手になつてから、四年が経過した。出会った当初はもつと違った間柄だったのだけれど、色々あっていまの形に落ち着いた。付かず離れず、浅くも深くもない、好き勝手言い合える、居心地のいい関係。

でもここ最近のリゼはちよつとおかしい。情緒不安定気味というか、とにかく頻繁に喚びたがり、会いたがり、どこにでもくつついて歩いて、しまいに帰したがらない。

そして紅緒の眼が届かないのをいいことに、自分には無頓着という悪習に拍車がかかっている。「いつか本当に倒れるかもなあ」

こくこくと、冷やしたお茶を飲む。

この懸念が杞憂で済めばいいものの、このままいけば、近い将来、現実になりそうで心配だった。そのとき近くにいれば助けてあげられるけれど、遠く離れた世界にいては、それもままならない。そもそもリゼの力なくしては、こちらに来ることすらできない。

紅緒は食卓の上で皿についたハチミツを舐め取っているチビクロに話しかけた。

「誰かずっと傍にいてくれるひとを探せばいいのね？　かわいいお嫁さんでももらえば、私にのみがみ言われなくてもいいと思うんだけどな」

「……にー」

「でもそうしたら、私がおこに来る理由がなくなるかあ」

途端に、焦った様子でにょーんと皿を飛び越え、チビクロが胸にしがみついてきた。

「にー！　にー！　にー！」

「どうしたの？　だ、大丈夫よ、すぐにはそんなことにならないと思うから……」

チビクロの小さな頭を撫でながら、紅緒は棚上げされているさっきの件を思い出した。

「……女嫌い、か。私なんかでどうにかできるとも思えないけどな」

正直、この話をもちかけられたこと自体が問題だ。リゼの研究の手伝いや家事だけでも、精神的、体力的にもめいっぱいなのに、それ以上となると、こちらに滞在する時間がいまより格段に長くなるだろう。あまり長居すると本当に帰れなくなりそうで怖いのだ。

「……でもリゼのお友達の頼みだったら、このまま断つちゃうなんてできないし……」

そんな具合に、思考はループする。結局、パンケーキを食べ、食器を洗い終えたときには、「会っただけ会ってみて、無理そうだったら断ろう」という前向きだが後ろ向きだかよくわからない結論に至った。

だが考えがまとまったおかげで、午後の仕事はよくはかどった。

調合薬を含む備品の在庫リストをまとめ、一週間分の研究記録に眼を通す。家の裏手の菜園にいて雑草を摘み、水やりをして、楕円の形で色がピンクのナスをたくさんもいで、かごに盛った。他にも、キャベツ、タマネギ、トマト、ウリ、に似て非なる野菜を収穫する。

チビクロを連れて散歩を兼ねた買い物に行き、帰って夕食の支度にとりかかる。全部ができた頃になって、ようやくリゼがのっそりと起きてきた。髪も服も寝乱れたまま、足をひきずるように厨房に現れて、ぼーっとしている。

「よく眠れた？」

紅緒はちよつとシチューの味見をしていた。お玉と小皿を持っているため、両手が塞がっている。

「……よかった」

「なにが？」

リゼの腕が問答無用で伸びてきた。と、避ける間もなく、後ろから抱きしめられる。腰にまわされた手と、肩の付け根を押さえつける手の力は痛いほど強く、相手との体格差もあるので、すつぽりと懐におさまってしまう。

髪をまとめ上げていたので、首筋は無防備で、そこにリゼの顔が押しあてられ、息が耳にかかる。寝汗をかいたのか、少し汗臭く、肌がしっとり湿っていた。紅緒にその気がなくとも、こんなふうにされればやはり動悸は激しくなるもので、鼓動が早鐘を打っている。

「な、なに？ どうしたの？ 怖い夢でも見た？」

「うん」

「どんな夢？」

「君が、僕を置いていく夢」

この会話ははじめてではない。

前にも何度か同じことがあって、そのたびに紅緒は同じセリフを繰り返してきた。

「ちゃんとここにいないじゃない」

リゼがけだるげに息をつく。耳にあたって、少しくすぐったい。

「そうだね。でも……今日の夢はいつもと違って、君が自分の代わりになって、見ず知らずの女を嫁に寄こしてとっとと帰っていったんだ。ひどいよね」

「えっ……と」

咄嗟に言葉が出てこない。若干後ろめたい気持ちがあるのは、まさにそのとおりのことを独りご

とにせよ口に出してしまっただけ。

リゼは忌々しそうに舌打ちし、腹立ちをおさめられないような口ぶりで続ける。

「薄情すぎるだろ？ 僕は君がいいんだって何度言っても信じてくれないし」

「……そ、そうね。薄情、かな？ わかった、今度からそういうこと考えるのやめる……」

空気が固まる気配。心なしか部屋の気温が下がった。

リゼの凭れていた頭がゆっくりと離れる。問答無用で身体を反転させられ、向き合わされる。リゼはおもむろに跪いて、紅緒の両手を拘束したまま顔を覗き込んできた。

紺青の眼が鋭い光を放っている。

「そんなことを考えていたの？」

「ちよつとだけ」

「へえ……」

ぞくつとするほど、冷たい微笑。やや首を傾けたしぐさが、妙に艶っぽい。

「僕、何度も言っているよね？ 君の代わりはいないし、いらなんだって。とにかく嫁だろうとなんだらうと、君以外の女は必要ない。もつと言うなら、君をどんな形でも失うくらいなら、それを阻止するために僕はなんだってやっちゃうからね」

にこ、と口角を上げて笑うリゼの眼は、だが怖い。

しかしそれも一瞬で、リゼは膝を払って立ち上がると急に話題を変えた。

「だから、君がいやならさっきの話も忘れていいよ。断るから。悩ませちゃってごめん」

「あ、それは——」

リゼがいつものように飄々とした態度に戻ってくれたことに胸を撫で下ろしつつも、心臓がうるさくて息が継げず、すぐには言葉が続かない。

リゼはなにと言わず待つてくれている。紅緒は呼吸を整えてから、口を切った。

「その話なんだけど、会うだけ会ってみようかな」

「本当に？」

「ん。だって、リゼのお友達の息子さんなんでしょ？ なんとかしてあげたいかな、つて。でも、会ってみてやっぱりだめだと思ったら、断ってもいい？」

リゼがすごい勢いで首肯する。

紅緒は自分がお玉と小皿を持ったまま、しかも鍋が火にかけっぱなしだったことにはたと気がついた。

「シチューが焦げちゃう！ リゼ、お腹すいたでしょ。手と顔を洗ってきて。今日の献立は野菜シチューと甘酢のワニ肉団子です。冷めないうちに食べよ。チビクロも！ おいで、ごはんだよー」

「ベニオ」

「え？」

隙があったのかもしれない。

リゼが、ちゅ、と頬にキスしてきた。

「ありがとう」

## 第二章 完璧なる王子計画 〈大変なことになりました〉

一

「なにを着ようかな」

ベッドの下に収納していた衣装箱を引っ張り出して、一着一着眺めながら、紅緒は悩む。

こちらの世界では夏でも長袖・長ズボンが主流で、素材は軽く、風通しがいいもの。標準服はラミザイといって、男女ともに上衣は立ち衿で丈は膝あたりまで、両脇にスリットが施されている。

下衣はゆったりとしたズボン。男性は腰に太いベルトを締め、女性は細い飾り紐を結ぶ。

身体のラインがすっきりと見えるし動きやすいため、紅緒は気に入っていた。

だが今日は人と会うので、ラミザイより少し格式の高いサラエンの方がいいかもしれない。

サラエンは、ワンピース型の長衣で、袖はちょうど振り袖のように長方形に長く、丈は踝まである。男性は下衣をはく。でも両脇にスリットが入っているので、歩きにくいことはない。右前を飾り紐で留める形式で、ラミザイより多少動きにくいぐらいだ。

「ね、どっちがいいと思う？」

紅緒はベッドの上に足を揃えてちょこんと座るチビクロに訊ねた。  
すかさず、リゼが抗議を入れてくる。

「待ちなさい！ 服を選ぶのに訊くのならまず僕だろう！ なんてそのチビに訊ねるんだ？ 理不尽だ！ 猫鼻肩だ！ 僕は断固抗議する」

リゼの大真面目な主張に、紅緒はやや呆れ気味に言った。

「……チビクロと張り合うのってどうかと思うけど。そんなにむきにならなくてもいいのにね？」  
「にー」

「うるさいぞ、おまえ」

ばちばちと、火花を散らすひとりと一匹。

紅緒はチビクロを掌にすくって抱き寄せ、上目遣いにリゼを振り仰ぐ。

「はいはい、じゃありぜはどっちがいいと思うの？」

「僕はこっちだ」

言って、後ろ手に隠していたものをさっと取り出す。見たことのない深い紺青のサラエンだ。

白銀の糸で細やかな花の刺繍がしてあり、手触りがやわらかく、上質な光沢がある。

「どうしたの、これ」

「君に似合うと思って仕立てた」

「また無駄遣いして」

きつ、と睨むと、リゼは慌てたように言い繕った。

「違う。これは、前回までの給料の一部だよ。たまにはこんなのもいいかなーと思って。君になにが欲しいのか訊いても、たいてい僕の研究試作品や消耗品や実用品ばかりだから……」

紅緒は口を引き結んで、じつとリゼを凝視した。

貨幣価値の違いこちらでは、お給料を現金でもらってもあまり意味がない。そのため紅緒はほとんど物品支給でもらっていた。自動翻訳通訳機や警報装置付きの指輪、疲れない靴、肌がきれいな石鹸、その他もろもろ。お金はこちらで不便がないよう買い物できるぐらいの金額しかもらっていない。それでも四年も貯めれば結構まとまった額になった。

リゼは大きな図体を縮こませて、俯き加減に指をいじっている。

「あの、それとも、やつぱり気に入らない？」

「そうじゃなくて。こんなに高そうなものは受け取れないの。私の仕事に見合ったぐらいのものじゃないと、だめよ。こういう特別な品物は、恋人とか、奥さんあげるものでしょう？ ただの仕事の助手にはすぎた贈り物です」

紅緒がきつい口調でたしなめると、リゼは眼に見えてしょんぼりしてしまった。

手の中のチビクロが場を取り繕うように「にー」と小さく鳴く。

「だから、今回だけね？」

「え？」

「今回だけ、受け取ります。ありがとう。きれいな色……あなたの瞳みたい」

はにかむように紅緒が微笑すると、リゼが弾かれたように表情を明るくした。

「いや、君の髪の色だよ。光に透けると、そんな感じに見えるんだ」  
「そう？」

はしゃいだりぜは、膝をついて屈んでいた紅緒の腰を一気にさらった。

「ひゃあっ」

と色気のない悲鳴が口をついて出る。紅緒はウエストを抱えられ、軽々と振り回された。

「僕の見立てだ、絶対似合うと思うんだ！ あ、よければ着せてあげようか？」

「遠慮します！」

べし、とりぜの顔面に平手打ち。

それでもまだりぜは声を立てて笑いながら、ぐるぐるまわっている。

「……そんなに嬉しいの？」

「だっていつ渡そうか、ずっと機会を待っていたんだ」

そう言うど気が済んだのか、トン、と紅緒を床に下ろす。

「……君の喜ぶ顔が見たかったんだ」

りぜは紅緒の肩に顔を埋めた。囁く声は小さすぎて、紅緒の耳には届かない。

「さ、じゃ、着替えてください。僕は外で待ってるから」

「うん」

「ああそつだ。王都まで行くのに、飛竜と魔法と、どっちがいい？」

「竜」

片手を上げてりぜが踵を返す。が、すぐに戻つてきてチビク口を鷲掴みにすると、再び出ていった。紅緒は腕に広げた紺青のサラエンを眺めて、大事に着よう、と心に決める。

着替えをしながら、今回の滞在予定が完全に狂ってしまったことについて考えた。いつもどおり

二連泊して帰るつもりだったので余分な下着を持ってきていない。

「向こうに着いたら買いに行かなきゃ」

「わかつた。じゃ、呼んでおく。あ、戸締りもよろしく」

「了解です」

片手を上げてりぜが踵を返す。が、すぐに戻つてきてチビク口を鷲掴みにすると、再び出ていった。

紅緒は腕に広げた紺青のサラエンを眺めて、大事に着よう、と心に決める。

着替えをしながら、今回の滞在予定が完全に狂ってしまったことについて考えた。いつもどおり

二連泊して帰るつもりだったので余分な下着を持ってきていない。

「向こうに着いたら買いに行かなきゃ」

よく話を聞いていないのでなんとも言えないが、いったいどのくらいの雇用期間なのだろう。

「引き受けるにしても、あんまり長くないといいな。こつちの空気に慣れすぎると困るもの」

だが、りぜはたぶん帰したからない。あの手この手で（しまいには泣き落としという最終手段さえ辞さず）引き止めにかかるだろう。それを思うといまからもう憂鬱だ。

着替えて、髪を結び上げ、ゆるくまとめて、化粧する。身支度を整え、窓の鍵や火の元を点検し、

小さな手荷物をひとつ下げて表に出た。

途端に、むっとした生きもの特有の強い臭気が鼻をついた。頭上に覆いかぶさる大きな影にはっ

とする。

朝の透明な光線を一身に浴びながら視界を埋めているのは、翼をやらかに折りたたみ、しなや

かな長い首をこちらに向けて座している、勇壮なる双頭の竜――

紅緒は顔をほころばせて、そちらに駆け寄ろうとした。

その矢先、空を泳いだ手首をばし、とりぜに掴まれる。なぜか、真顔。遠慮のない眼で紅緒をまじまじと見つめて、打ちのめされたような悲愴な表情を浮かべる。

「どうしたの？」

「ひどく」

「えっ」

びくっとして、自分の恰好を見下ろす。髪に手をやり、ほつれを気にしながら、なにがどうおかしいのか、うろたえながらあちこちを見る。

「ど、どこがひどいの。なにか変？ なにか変？」

自分ではまあまあ似合っている、と思っていただけに、ショックだ。

「君は……っ」

毗をきつく上げて、リゼが唇を真横に引き結ぶ。力づくで引き寄せられて、互いの身体が密着した。「君は……っ、ひどい！ なんでそんなにかわいくなくなるんだ！ 人前に出るのにわざわざきれいにするなんておかしいだろう！」

「おかしいのはリゼの方！ 人前に出るからきれいにするんじゃない。なに言ってるのよ、もう」

「僕は、そんなにきれいな君を他の男に見せるなんて、いやだ」

紅緒はこめかみを押さえた。頭痛がする。毎度のことながら支離滅裂な言い分だ。

「……あのね、言っておきますけど、私の容姿は十人並みです。私をきれいななんて褒めるのは、りぞぐらだから。それ、完全に身内の欲目。外でそんなこと言ったら笑われるのは私よ？」

紅緒は大きな溜め息をついてリゼから離れ、荷物をその胸に押しつけると、鮮やかに半身を翻した。

「テス！ サジェ！」

双頭の竜——雲ひとつない青空に映えるダークアイアンの体軀が光を乱反射している。一枚一枚が涙型の鱗はギザギザで、触れると怪我をしそうだ。

智慧深いトパーズの瞳が紅緒を捉えて、わずかに和む。

——息災か？

と思念波で訊ねてきたのは、右側の竜、テス。

——すまぬ。主がまた無理を言っているようだな。

と常日頃より苦労性なのは、左側の竜、サジェ。

紅緒は屈託なく微笑み、両腕を天に向けて広げた。

「会えて嬉しい。元気だった？」

その手に擦り寄るように、二竜の頭部がくねって下がる。

「……あんまり甘やかさないように」

いつのまにか背後にびたりとついていたらリゼが、紅緒の口元をそっと手で塞ぐ。

「……キスとか、しないでくれ。妬ける」

いちいち言うことが細かくて正直鬱陶しいものの、リゼはなんでも思ったことを口に出すのでわかりやすい。肩越しに一瞥すると、ぶつきらぼうな口調のとおり、完全に拗ねていて、いかにも不機嫌そうだ。





リゼの屈託ない高笑いが蒼穹に吸い込まれてゆく。いつもどおり仲良く喧嘩する二人と一匹をのせて、双頭の竜は、一路、王都へと向かった。

二

眼下に広がる王都は、想像以上に整備された都市だった。

「すごい……」

紅緒は思わず身を乗り出しかけ、リゼに肩を押さえられる。

「テス、サジエ、ゆっくり旋回してくれ」

双頭の竜はやや高度を下げつつ、水平な遊覧飛行へと移った。

「王都ラッセンシエルは、機能的構想のもとに建設された都市で」

と、リゼが紅緒を左腕できつく抱えたまま説明をはじめた。

空いた右腕を伸ばし、指であちらこちらを示していく。

「市街の中央に建つのが王宮で、正式名称はクラヴ・サンバロウ・レンヴァアルツ宮殿。市街全体を囲んでいる白い筋は環状道路。宮殿から幾筋も放射状に伸びている道は、それぞれ大建造物群に続いている。たとえば、一番手前に見えるあの建物は大聖堂。その隣の道にあるのは、貴族議事堂。他にも大図書館や魔法研究所、学校、美術館、歌劇場、広場、市役所、まあ諸々の施設が環状道路

沿いに建てられているんだ。あとで君の好きなときに、案内するよ」

「うん、楽しみにしてる」

「さあ、じゃ、行こう」

リゼの合図で、竜は下降した。地上が近づくにつれ、人々のどよめきや喚声が大きくなる。皆、急に空が陰ったことで上を見上げ、突然現れた竜の姿に驚いていた。

双頭の竜が着地点に選んだ場所は、中央の王宮敷地内。ぽつかりと空いた空間の、青々とした芝生の上に舞い降りた。

「送ってくれて、ありがとう。テス、サジエ」

揺れないよう、落ちないよう、慎重に配慮された空の旅は快適だった。紅緒が礼を言うと、竜の鼻から息が噴き出る。

——我らに用のあるときは遠慮なく呼びなさい。  
と、テス。

——くれぐれも間違いのないよう、主を頼む。

と、サジエ。

リゼに抱き上げられたまま地面に立つと、降下の際の風圧に巻き込まれないよう距離を置いて待機していた一団が、わっと集まってきた。

先陣を切って駆けつけたのは、紫の衣を纏った身なりのいい、貫禄のある壮年の男だった。

「リゼ！ よくぞ来た、待ちかねたぞ！」

「出迎えはあなただけですか」

対するリゼはそっけなく、冷やかな、陰険な声で言った。

「招かざる客には挨拶もない、と。いい態度の息子ですね」

「そう皮肉るな。あれは今日トラムに出かけておる。領地相続の件でひと騒動あつてな、どうして  
も今日行かねばならなかったのだ。明日には戻るだろう。戻ったら挨拶に行かせる。それよりも——」

男がそわそわしながら、きよろきよろとあたりを見まわす。

「どこだ？ おまえ推薦の『帰したくなくなる』ほどのいい娘とやらは？」

「眼の前にいるでしょう」

「え？」

男の視線が下がる。しげしげと見つめられて、あんまりそれが長く続くものだから、紅緒はしま  
いにはいたたまれなくなった。

そして一言。

「子供じゃないか」

「帰ります」

リゼは紅緒の肩を抱き、即座にまわれ右をした。まだ居残っていたテスとサジェにその旨を告げる。

「用がなくなりました。このまま家に戻ります」

「わー、待て待て！ 待てと言っうのに！」

焦って、男が引き止めにかかる。

リゼは肩に置かれた男の手を払いのけながら、辛辣で嫌味のこもった視線を注ぐ。

「あなたの無礼さには呆れました。友達やめます。金輪際、僕に関わらないでください」

「すまぬ！ 悪かった、余の失言だ。許せ、このとおりだ」

「どのとおりでも許しません」

「リゼ、頼む」

「いやです。僕のベニオを侮辱したんです。許しません。罰します。覚悟しておきなさい」

「ベニオ？」

男の注意が紅緒に向けられる。困り果てたまなざしが、必死に紅緒の助けを求めていた。

「ベニオ殿とおっしゃるのか。すまない。余が軽率だった。わざわざ遙か遠方の地よりお呼び立て  
しておきながら、心なき言葉であった。幾重にもお詫び申し上げる」

男が頭を下げる。本当に反省し、謝罪しているのがわかった。

「頭を上げてください」

「そなたが許してくれるまで上げられぬ」

なかなか頑固だ。紅緒は大きく息を吐き、言った。

「許します。いいでしょう、リゼ」

「許さなくていいんですよ、そんな男。あとで僕が絞めてあげます」

「私がいいと言っているんだから、いいの。リゼも許してあげて。それから、お友達に、罰するど  
か、覚悟しろとか言っうのもやめなさい。物騒でしょ」

「物騒でも本気なので」

リゼは反抗的に眼を怒らせていたが、紅緒にたしなめられると、渋々従った。

紅緒は男に向き直って告げた。

「私、身体は小さいですけど、これでも二十四歳です」

「えっ。あ、いや、そ、そうなのか。では、そなたの方が王子より三つほど年上だな」

男は咳払いをして、朗らかな表情を取り繕う。

「年も近いことだ、きつと仲良くなれよう。どうか王子をよろしくお頼み申す」

紅緒は黙っていた。ある単語が消化できず、前を向いたままリゼを呼ばわった。

「リゼ」

「はい」

「王子って、どういうこと？ あなた『友達』が息子さんの件で困っているから助けてあげたい』って、言わなかった？」

「嘘は言っていない」

開き直ったリゼがやけくそ気味に男を見る。

「（一応まだかろうじて）友達。で、息子が王子」

ということとは、眼の前のこの人物はダスタ・フォン国第九十三代アワード国王陛下——

紅緒は茫然とした。頭が真っ白になって、思考が飛んだ。隣ではリゼが俯き加減に指をいじりながら、ぐずぐずとなにか唱えている。

「……だつて君、王族が相手だつて言ったら絶対引き受けてくれなかっただろう？ だから黙っていたんだ……お、怒らないで……」

アワードが控えめに、だが品位のある物腰で場を取りなしてくる。

「余がそうしてくれと頼んだのだ。リゼを責めてくれるな」

そして恭しく紅緒の手を取り、指先に口づけた。

「改めてご挨拶申し上げます。余はダスタ・フォン国第九十三代国王、アワード。息子の名はジークウインだ」

ジークウイン・テラ・リュッセル・ダスタ・フォン——正統なる第一王位継承者。

くらりと眩暈がする。まさかこんなことになるなんて、と後悔しても後の祭りだった。

連れていかれた王宮は四棟からなる巨大建造物で、紅緒が見たこともないくらい豪華絢爛、堂々たる風格にみちていた。

王と王妃、それに王子の部屋と、執務室のある本棟。

王室礼拝堂のある正面棟。

国王夫妻並びに王子の側近であり、さらには国務の舵取りをする宮廷人のための、右翼棟。

王宮で働く労働者のための、左翼棟。

そして、警備や憲兵、親衛隊、近衛兵他、軍事関係者が詰める別棟。

室内装飾はすべての調度に素晴らしい細工が施され、紅緒の眼には眩しすぎた。

「まずくつろいでくれたまえ」

と、アワードに案内された夏用の食堂で、リゼと二人で一服しているところへ、

「師がこちらにおいでとは本当か」

ばたん、といきなり扉がひらかれる。

血相を変えて息せき切って現れたのは、茶髪茶瞳、片眼鏡をかけた、リゼよりも背が高い男だった。濃緑のラミザイを着て涙型の銀の耳環じかんを下げている。

リゼを見つめるなり、瞳孔がひらいた。

「お久しぶりでございます、師よ。お元気そうでなによりです」

「元気じゃない」

男を見るなり、「ち」と舌打ちしたリゼは、おもむろに顔を背けて牽制けんせいした。

「言っておくが、僕はいま忙しいからな」

紅緒は白と青と金に縁取られた素晴らしい陶磁器のカップでお茶をいただきながら「どこが？」と突っ込む。

すると男が紅緒に視線をやり、すぐさま腕を腹に添えて深々と頭を下げた。

「休息中、突然お邪魔して失礼しました。私はリゼ・クラヴィエ師が第四弟子、ラヴェル・イングリッサと申します」

「ベニオ・サガラです。ベニオと呼んでください」

「ありがとうございます。私のことは、どうぞラヴェルとお呼びください」

ラヴェルと名乗った男は愛想よく微笑した。ついでつかつかとリゼの傍にやってきて、にこーと笑う。だが口元だけで眼はまるで笑っていない。

「ここで会ったが百年目、逃がしませんよ」

「百年も経ってない」

リゼは焼き菓子を口に放り込み、もぐもぐしながら言うが、眼を合わせようとはしない。

「それでも、しばらくいらしてませんか？ その間、私はずーっと、放置されていましたよね？」

「おまえに任せていたんだ」

「また適当なことを……。まあ、いいでしょう。私は過ぎたことは申しません。なにぶん師はお忙しい方ですし、風の噂も耳にしております」

そこで、ちら、と顔を窺うかがわれて紅緒は小首を傾げた。風の噂とはなんだろう？ ラヴェルがこほん、と付け足したように咳払いする。

「こうして……噂の方を直に拝見できましたので、無粋なことは申しません」

「じゃ、帰れ。僕とベニオの甘いひとときが台無しだ」

「そうはいきません。仕事がたまっております」

「あとにしろ」

「いえ。ここで逃がしたら最後、師は行方をくらますに決まっております。絶対そうです。どうか一緒に来てください、お願いですから」

「断る」

しかしラヴェルも負けてはいなかった。リゼの耳元に口を寄せ、紅緒には聞き取れないほどの声で囁く。

「ただとは申しません。宮廷人の情報ではどうです？ 師のベニ才殿に手を出しそうな、女たらし、口説き魔で有名な危険人物ばかりを網羅した一覧名簿です。見たくないですか……？」

リゼの眼が、きらつと光る。

「名簿はどこにある」

「研究室に」

リゼはがたん、と立ち上がった。

「すまない、ちよつと野暮用ができた。いつてくる」

紅緒は頷き、ひらひらと手を振った。

「いつてらっしゃい」

「にー」

「僕がいなくても浮気しないでね」

すかさず、紅緒の右の脛の上にキスを落とす。素早い動作に、避ける間もない。

「こらー！」

リゼは笑いながら身を引いて、背を向けた。

「部屋は同室するように頼んでおいたから！ 夜は一緒に寝よ」

そしてラヴェルと二人、騒々しく出ていった。

「お弟子さんなんて本当にいたんだな……」

紅緒はぼつんと取り残されてしまい、物思う。いるとは聞いていた。だが詳しいことはなにも知らされていない。

ぬるくなったお茶を啜る。

チビクロは皿に盛られたビスケットをしゃくしゃくいただいている。

「私、リゼのこと結構なんでも知ってるつもりでいたけど、本当はそれほどじゃないのかも。どうしてかな？ ちよつと寂しいね……」

ペろり、とチビクロが紅緒の指先を舐める。なぐさめてくれているのだ。

紅緒がポケットに忍ばせていた猫じやらしでチビクロをかまっていると、侍女が来て告げた。

「陛下よりお使いが参っております」

案内された部屋で待っていたのは、二十数名の女性。紹介もそこそこに、脱がされ、頭のとっぺんから足の爪先まで、事細かに採寸された。さらにどんな香りや石鹸が好みか、好きな花、食べ物の好き嫌い、枕の硬さ、シーツの素材、云々。あらゆる事柄を根掘り葉掘り訊かれた。

そのあとは入浴。マッサージ付き。てきぱき動く侍女らに最高級のサラエンを着せられて、屋上の小庭園が見える小さな部屋へ案内される。

そこで待っていたアワードに王妃カルバロッサを紹介され、三人で食事。相槌を打つ隙もないほど、ほぼ一方的にジークウイン王子のことを聞かされまくった。

与えられた部屋に辿りついたときには疲労困憊で、なにもする気がおきなかった。用意されていた寝間着ではなく、持参したパジャマに着替える。ばふん、と天蓋付きベッドに倒れ込む。サイズは特大。大人四人がゆうに休めるくらいの幅と長さがある。

「にー」

チビクロが頬に擦り寄ってくる。

閉じていた瞼をうつすらと、持ち上げる。

「……チビクロも疲れたでしょ。今日一日、めいっぱい、私のお伴をしてくれたものね……ありがとう、心強かったよ。リゼはまだ帰ってないけど……もうだめ。眠い。先に寝てようか……」

小さな温かい身体を抱き寄せて丸くなる。睡魔にすぐに襲われ、紅緒は瞬く間に眠りについた。

深夜に眼が醒める。リゼの姿はない。おそらく研究に熱が入り、途中でやめられなくなっているのだろう。紅緒は嘆息し、上着を羽織ると、用を足すために部屋を出た。

回廊には、長時間用のロウソクに火が点された燭台が均等に置かれていて、夜でも不便はない。

トイレは各部屋に簡易用のものしかなく、後始末のことを考えると使用はためらわれた。

いつのまにかチビクロがついてきている。紅緒は愛猫を左肩にのせて一緒に連れていった。

その帰り、あとひとつ角を曲がれば部屋が見えるというところで、ひとの話し声が聞こえた。

——部屋の前に、誰かいる？

紅緒はそっと部屋のほうを覗き見た。部屋の斜め向かいあたりに人影が二つ。眼を凝らす。ひとりにはアワード王で、もうひとりとはわからない。だが、いままで見たこともないくらい美しい男性だった。

冴え冴えとした切れ長の瞳。硬質な印象の頬、一切の甘さを削ぎ落としたような冷たい感じの唇。高すぎない鼻、形のいい眉。顎のラインは絶妙なカーブを描いている。若く、背は高い。リゼくらいはあるだろう。肩幅は広め、鍛えているらしく、いかにも頑丈そうだ。黒い光沢のあるラミザイを纏い、黒いベルトを締め、黒い長剣を佩いている。短くばつさり切った銀髪。額には黒い飾り帯。左手中指には指輪。まっすぐ立つ姿は覇気にみち、近寄りがたい雰囲気醸し出している。

……もしかしたら、あれがジークウイン王子？

そうかもしれない、と思う。性別は違うがカルバロッサ王妃によく似ている。

紅緒は迷った。立ち聞きはよくない。だがとても出ていける雰囲気ではない。二人は互いに一歩も引かず、押し問答をしている。

突然、王子らしき人物が声を荒らげた。

「だから女は当分いらないと、何度も申しあげているでしょう！ 余計なことはしないでください」  
「当分とはいつまでだ？ そなたが最後の交際指南役をクビにしてから、既に季節が二つ変わった

ではないか。縁談も片つ端から断つて、夜会や舞踏会もほとんどすつぽかし、恋文は焼き捨てて——女性とみれば無視を決め込む。そなたは余のただひとりの息子で、王位を継ぐ身なのだから、いつまでも独り身というわけにはいかんのだぞ」

アワードの言葉に紅緒は自分の推測があたつていたことを知る。チビクロに「しー」というしぐさをして、壁に背をあてたまま、こそっと盗み見た。

——あれが、ジークウイン王子。

性格悪そうだな、と大変失礼なことを思う。美しいけれど険がある。父王を見る眼には親しみのかけらもなく、冷然としていて、嫌悪すら見え隠れしている。

ジークウインはなげやりに答えた。

「わかつております」

「わかつてらん」

「わかつておりますよ！ いずれは妃を娶ります」

「いずれとはいつだ」

「いずれです。だいたい私が決めなくとも、秋には内定の儀が控えています。そのとき選ばれた妃候補の中から選ばばいいのでしょうか。それに父上はまだご健勝なのですから、私の婚儀など先送りでもよいではないですか」

「そんな悠長なことを言っておつて。もし余がいまぼつくり逝つたらどうするのだ」

「そのときは適当にみつくりいます」

アワードが絶句した。愕然と、信じられないものを見る眼でジークウインを眺める。

「適当——生涯の伴侶を適当に選ぶと、申すのか」

さすがに失言だと気づいたのか、ジークウインは渋面を浮かべる。だが発言を取り消そうとはせず、肩を落として溜め息をつき、髪を掻き上げた。

「疲れているんです。明日は朝議があるので、それに間に合うように休まず馬を飛ばしてきました」

「ほれ、だからそういう疲れたときに、癒してくれる妻がいればいいと思うだろう」

「思いません」

ジークウインは手強かった。アワードがとりつくしまもなく続ける。

「女は邪魔です。騒々しく、我儘で身勝手、すぐ泣いて怒つてものをねだる。おおかた今度の女もそうでしょう。独り身の方がよほどいい」

「今度の娘は違うぞ。今日実際に会つてみたのだが——」

「同じです」

途中で避つて、憎悪のこもつた声で吐き捨てる。

「はじめはしおらしく手ほどきのようなことをしても、次第に自ら言い寄り、しまいには夜這いをしかけて既成事実をつくらうと目論む。そんな女ばかり百人も相手にしてみてください。私がい加減いやになるのも道理でしょう。とにかく、そのなんとかという娘には金でも宝石でも与えて、とつと引き取ってもらってください。私は会いません」

紅緒は、すつと二人の前に出ていった。

アワードはぎよつとした顔をした。ジークウイーンは不意に現れた紅緒を不審そうに一瞥し、「ここで止まれ」と冷やかに命じてくる。

「子供が夜分にふらつくな。ここから先は王子の部屋だ、ただちに下がれ」  
「ま、待て、ジーク」

紅緒はこちらの世界の正式な挨拶をした。左足を深く引き、掌を地に向けて、顔を伏せる。そのしぐさが流れるように優雅であればあるほど育ちがいいと思われる、リゼに教えられた。

「はじめてお目にかかります。ベニオ・サガラと申します」

「……何者だ？」

許しも待たず紅緒が顔を上げると、ジークウイーンの手が剣の柄に伸びた。  
慌ててアワードが飛びつく。

「斬るな！ 待て、その娘は怪しい者ではない。そなたの新しい交際指南役だ」

「これが？」

ジークウイーンは眼を丸くした。不躰な視線を浴びせられても、紅緒は表情を変えなかった。

「ふん、立ち聞きとほいい趣味だな。育ちが知れるというものだ。だが、聞いていたのなら話が早い。そちは必要ない。帰れ」

「はい」

「ひえっ」

紅緒が短く答えると、アワードは泡を食い、ジークウイーンは満足そうに口の端を歪めた。

「ま、待つてくれ、ベニオ殿。それでは話が違うではないか」

紅緒はひよいと肩を竦めた。

「もともと、王子——いえ、殿下にきちんとお会いしてからこのお話を引き受けるかどうか決めるつもりだったんです。でもご本人がこのとおりでは、私にできることはないと思います」

「余を見捨てるのか」

「お役に立てず申し訳ありません」

紅緒は頭を下げて謝った。

「ひとつだけ言わせていただきたいのですが、お許しいただけますか」

アワードは呻き嘆きつつ、頭を抱えている。

「ああ……なんだね」

「殿下は女性との交際云々よりも、まずその性格を矯正なさった方がよろしいかと存じます」

「……なんだと？」

ジークウイーンが地の底を這うような低い呟きを洩らす。

紅緒は平然としたまま、くつと顎を上げた。真正面から視線を交える。

「もう一度言ってみろ」

「何度でも言います。あなたはまずその性格を直すべきです。さきほどから聞いていれば女性蔑視の罵詈雑言の数々、恥を知りなさい。ご両親があなたのためを思って手を尽くしてくれているのに、ありがたく思うわけでもなく言いたい放題。ひどすぎます。なんですか、余計なことって。親が子



のために頭を下げて頼み込み、連れてきた者の顔も見ずに蔑んで帰らせるなんて、ひとの上に立つ人間のすることじゃありません」

厳しく言い返しながら、紅緒はいったん呼吸を整え、なおも続けた。

「だいたい、国民の人口の半分が女性なんですよ？ 将来王位に就こうという方が、嫌いだの、苦手だの、邪魔だの言っていていいんですか？ ましてや自分の子供を産んでもらう女性を『適当』に選ばれるなんて、いったい何様のつもりです。王子というだけでなにかもが許されるわけではないんです。それほど身勝手に傲慢で冷酷な国王が民衆に支持されると、本気でそう思っていないんですか」

ジークウイーンの紫の眼が怒りを滾らせ、めらめらと燃えていた。あまりに怒りが激しいためか、拳が震え結ばれた唇の端からは血が滴った。こめかみに血管が幾筋も浮き上がるほど凄まじい形相で睨まれても、紅緒は一步も退かなかった。

「少なくとも、私はあなたのような国王などいりません」

ジークウイーンが暗澹たる微笑を浮かべた。顔の造作が端整なだけに、鬼気迫る迫力だ。「……よく言った。この私にそこまで言うからには、相応の覚悟ができているのだろうな」

まぎれもない殺気に、チビクロがいち早く反応し、「シャツ」と威嚇する。

紅緒はそれでも臆することなく、ジークウイーンの眼を正面から見返した。

「……誰だつて愛するひとがいるんです。陛下だつて、あなたを愛しているから心配して世話も焼くんじゃありませんか。ひとの心をないがしろにしておいて、それに気づきもしないなんて、正し

くないでしょう。殿下自身、いやな目に遭ってきたのかもしれない。ひどい裏切りにも、遭ったかもしれません。傷ついたのでありません。でもだからって、知り合う前から浅ましい女呼ばわりをして、拒まなくてもいいんじゃないですか？ 少なくとも私は、お金や宝石が欲しくてここに来たわけじゃないのに」

ジークウイーンの表情がはつとして、揺らいだ。

絶対に泣くものか、と思う。悔し涙が溢れそうになったが、紅緒は懸命にこらえた。それでも膝が震え、いまにも倒れそうになったそのとき、トン、と背中がなにかにぶつかって、両肩を支えられた。見上げると、そこにいたのはリゼだった。

「……泣かせましたね……」

ぞつとするほど禍々しい声だった。

アワードは咄嗟にジークウイーンの前に身体を投げ出した。

「ま、待て。リゼ、話を聞け」

「いやです。僕のベニオを悲しませた挙句、言い訳をするとは見苦しい。あなた、僕に誓いましたよね？ ながあつてもベニオを傷つけないと。早速誓いを破ったんですから、死んで詫びるのが当然でしょう。で、どっちが悪いんです？ あなたですか？ それともそのクソガキですか？」

魔法が発動する気配。紅緒はリゼの手に手を重ねて、制した。

「やめて、リゼ」

「でも」

立ち読みサンプル  
はここまで

「いいの。朝になったら、家に帰りましょう」

「それはかまわないけど……だつたら朝と言わず、いまずぐ帰ろうか？」

「ううん。いまはちよつと疲れたから、眠りたいの」

リゼは首肯して、流れるような動作で優しく紅緒を抱き寄せ、腕にすくい上げる。そのまま彼ら  
を無視して、すたすたと向かいの部屋に向かった。

斜め向かいの扉が完全に閉じるのを見届けて、ようやくアワードは止めていた息を吐き出した。  
片手で胸を押さえ、もう片方の手の甲で顎の下を拭う。冷や汗でびっしょりだった。

「生きた心地がしなかつたぞ」

いまだかつて、大魔法使いリゼ・クラヴィエを怒らせて無事だったものはいない。そのことを我  
が眼で見えて知っているだけに、紅緒に窮地を救われたと、アワードはすこぶる感謝した。

息子が黙っているのでふと見ると、二人が消えた扉をじつと見つめている。

「いかがした？」

「……あの娘の名は？」

しかしその咳きは小さすぎて、アワードの耳には届かなかった。

無言のまま立ち尽くす息子の横顔には、いまだかつてない奇妙な表情が貼りついていていた。混乱と  
戸惑いと、なにか熱いものに触れたような、痛みと驚きにみちた顔だ。

突然、なにを思ったのか握った拳で壁を殴りつけた。次に額を繰り返しぶつける。

「や、やめんか。額が割れてしまう」

「……あんな娘ははじめてだ……」

そう言った息子の眼の奥に微かに宿っている炎を、アワードは見逃さなかった。

リゼは紅緒をそつとベッドに横たえて、掛けものを胸まで引き上げた。床に膝をつき、枕元に置  
いた腕に顎をのせて、伸ばした手で紅緒の頭を撫でる。

「ありがとう、リゼ」

「僕はなにもしていない」

「ううん、あのとき来てくれてよかった。助かっちゃった。もう少して泣きそうだったの」

リゼはすつくと立った。

「やっぱり殺してくる」

「だめ」

「どうして」

薄闇の中でリゼの紺青の眼が怒りに燃えている。激情が、いまにも迸りそうだ。

「君を泣かせる奴は誰であろうと断罪する。僕は容赦しない」

紅緒は枕に頭を埋めたまま、かぶりを振った。

「私は傷ついたわけじゃなくて、少し悲しかっただけ」

「それも同罪だ」